

全日本ベテラン選手権の女王と一緒に。 みんなが夢中になったテニス教室!



▲昨年10月の全日本ベテラン選手権(55歳)シングルスで優勝した阿部睦子さん(56)。毎日ラケットを持ってコートに立つと話す阿部さんの元、テニス教室は行われた。



▲今回コーチを務めた阿部さんは「最初はラケットの枠にボールを当てていた子が、最後にはしっかり打てるようになった!」と楽しそうだった。



▲「硬式は初めて」と話す川上知香さん(右)と、「本格的に教えてもらおうのは初めて」と言う櫻井美鈴さん(左)。「ボールを引きつけて粘って打つなど、参考になった!」(櫻井)と有意義に過ごした様子。

レイクスのコーチと選手が会場を爆笑に。 大盛り上がりのバスケットボール教室!



▲2児のパパでもある藤原選手。試合での素晴らしい顔はどこへ? 子供たちと一緒にコート走る顔が優し過ぎです。



▲普段、チームが行う学校訪問で子供たちを教えている本多選手。すぐに子供たちのハートを掴んでいた。「元気をもらいました!」(本多)



▲反射神経を競うゲームで手本をみせる藤原選手(右)と本多選手(左)。根拠コーチ(中)の指示した肩や頭などに触れつつ、「ボール」コール時に早く球に触れたら勝ち。選手のへっぴり腰に笑い集中。



地域 OHARA 密着

「同情ではない交流に胸を打たれています」

児童養護施設「鹿深の家」施設長
打田 絹子さん

大原薬品工業の皆さんは、同じ目線で考えてくださいます。以前も社内で寄付金を集めてくださって、それを元に私たちが望んでいた新しい布団を購入して贈ってくださいました。何年も使っていた施設の布団が汚れていたのを知っての配慮でした。同情ではなく、一緒に歩もうという姿勢にいつも胸を打たれます。今回の催しでは工場見学も企画していただきました。社会とのつながりが上手いかわからない子供が一番の楽しみは工場見学だと言いました。本当にうれしかったです。



▲「鹿深の家」の施設長になって5年目の打田さん「教員たちも楽しめていたのが印象的でした」

「子供たちをレイクスの試合に招待したい」

大原薬品工業代表取締役社長
大原 誠司さん

私自身、甲賀市の出身で、以前から何か地元に戻りたいと思っていました。そんな想いで約3年前から社会福祉法人「甲賀学園」(鹿深の家)とのおつきあいが始まりました。また甲賀市のミニバスの子供たちの交流や競技力向上につなげたいとの想いで、今年1月には「大原チャレンジマッチ」を開催。レイクスさんとはその頃からの付き合いです。来シーズンはぜひ甲賀市の子供たちをレイクスの試合に招待し、会場を甲賀市でいっぱいにしたいですね。



▲バスケットとテニス経験者でもある大原さん。子供たち以上に? 今回の催しを楽しんでいるようでした。

大原薬品工業株式会社

Ohara Pharmaceutical co., Ltd.

甲賀市に本社を構える医薬品メーカー「大原薬品工業」。常に社会貢献できる企業でありたいと願う大手が、一つの方向性として続けているのが地域貢献活動だ。6月2日には本社内のバスケットとテニスコートを開放。地元の児童養護施設「鹿深の家」の子供たちや教員、大原薬品工業の社員らが一緒に清々しい汗を流した。滋賀レイクスターズから根間洋一アシスタントコーチ、藤原隆充・本多純平選手も参加し、会場を盛り上げた。



▲子供たちのサイン攻撃に笑顔で応える、滋賀レイクスターズの藤原選手。

大原薬品工業の地域貢献活動は相手の目線にあった取り組みが特徴だ。例えば、滋賀レイクスターズと協力して1月に開催した「大原チャレンジマッチ」では、甲賀地域のミニバスと中学バスケット部を招き、プロが実際に使用するコートに立たせることで夢を育もうと考えた。また、地元の児童養護施設には社員で集めた寄付金を元に、施設から需要の高かった布団を全員に贈った。大原薬品工業の大原誠司代表取締役社長(49)は「社会と向き合う時のテーマは愛情と未来。相手が何を求め、それにどう応えられるかが大切」と話す。この姿勢は困った人を助けたいと願う医薬品メーカーとしての方針にも共通する。だから「地域貢献活動は社員の成長にもつながる。与えるだけでなく、与えられるもの」と大原社長は言う。

大原薬品工業の地域貢献活動は相手の目線にあった取り組みが特徴だ。例えば、滋賀レイクスターズと協力して1月に開催した「大原チャレンジマッチ」では、甲賀地域のミニバスと中学バスケット部を招き、プロが実際に使用するコートに立たせることで夢を育もうと考えた。また、地元の児童養護施設には社員で集めた寄付金を元に、施設から需要の高かった布団を全員に贈った。大原薬品工業の大原誠司代表取締役社長(49)は「社会と向き合う時のテーマは愛情と未来。相手が何を求め、それにどう応えられるかが大切」と話す。この姿勢は困った人を助けたいと願う医薬品メーカーとしての方針にも共通する。だから「地域貢献活動は社員の成長にもつながる。与えるだけでなく、与えられるもの」と大原社長は言う。

単発で終わるのではなく、継続した地域貢献活動を

全ては患者さんの立場から 医療の未来のために信頼の医薬品を

高品質で安価なジェネリック医薬品の製造販売企業として、フルラインを有する原薬製造企業として、常に「患者さんと医療現場の願いに応える医薬品メーカー」でありたい。大原薬品工業は、昨日より今日、今日より明日、さらに社会貢献できる企業を目指して努力を続けてまいります。



子どもたちに愛情と未来を



Ohara Pharmaceutical co., Ltd.